学苑・日本文学紀要　第九五一号　八四～一〇三（二〇二〇・一）

尾崎紅葉の死
―その前後（二）―

吉田昌志

五　十千万堂出版部と「換菓篇」

第三節「大学病院入院」において述べたように、病床の紅葉へ献ずる門生の創作合集「換菓篇」の企ては、退院から十一日後の三月二十五日には早くも具体化しはじめていたのだったが、泉鏡花宅での門生の相談会に先立って、十八日には十千万堂出版部創立の話が起り、二十三日にその相談が行われた。退院の日（十四日）の胃癌の宣告と翌々日の「二六新報」紙上での公表が周囲を動かしたことは間違いない。

『換菓篇』は、紅葉の別号を冠したこの出版組織の編輯企画と併行して進められ、かろうじて紅葉の生前に刊行が成った唯一の本だった。以後逝去の十月まで七か月余りの間には多くの人々のさまざまな動静があったので、以下に関連する事項を時系列で示したのち、説明を加えたい（「一覧」には、通し番号を付け、事項末尾に典拠を示し、「十千万堂日録」は「日録」、山里水葉筆録「十千万堂日誌」は「日誌」と略記。紅葉書簡は岩波書店版『紅葉全集』第十二巻収録の番号を記す。刊本そのものをさす場合のみ『換菓篇』、それ以外は「換菓篇」と記す。全集も同じ。人名再出は号のみを記す）。

［十千万堂出版部・「換菓篇」関係事項一覧］

明治三十六年

（1）3・18　川喜多不曲が十千万堂出版部創立の件で尾崎紅葉宅を訪れた。［日録］

（2）3・23　紅葉宅で十千万堂出版部の初めての相談があった。［日録］

（3）3・25　泉鏡花宅で門生による相談会があり、紅葉に献呈する「門生集作」を出すことが決定した。［日録・鏡花の星野麥人宛書簡（24日付）］

（4）3・28　小栗風葉は中山白峰宛に「デヂケエション」の原稿締切を五月十五日と伝えたむね、紅葉に書き送った。［風葉の紅葉宛書簡（本日付）］

（5）4・14　紅葉は風葉を招き「デチ（ママ）ケエション」の編輯について問うた。［日録］

＊このかんに「換菓篇」の題名が決定した。

（6）5・11　「二六新報」（一面）に「換菓篇」の「社告」が載った。

（7）5・11　「東京朝日新聞」（五面）に「文壇佳話『換菓篇』」が載った。

（8）5・11　「報知新聞」（三面）に「尾崎紅葉と其門下」が載った。

(9) 5・14 紅葉は巌谷小波に「全集」編輯と十千万堂出版部のことを書き送った。[紅葉書簡396]

(10) 5・15 この日が「換菓篇」の原稿の締切だった。[前出(4)]／紅葉は小波に、大阪駸々堂、一二三館のことを書き送った。[紅葉書簡397]

(11) 5・16—5・30 鏡花作「薬草取」が「二六新報」(一面)に掲載された。

(12) 5・31 紅葉は小波に、博文館館主大橋新太郎との全集の成約、大阪駸々堂、一二三館、学齢館の消息について書簡を送った。[紅葉書簡405]

(13) 6・1—6・15 徳田秋聲作「ゆく雲」が「二六新報」(一面)に掲載された。

(14) 6・4 紅葉は、大阪在の水落露石に全集の体裁、来月の発刊予定を書き送った。[紅葉書簡409]

(15) 6・4 紅葉は広津柳浪に「小文学」合本の所蔵を問合せる葉書を送った。[紅葉書簡410]

(16) 6・4 博文館の内山正如から、「新著百種」版権所有の件について葉書が届いた。／山里水葉が、紅葉全集用の資料として、春陽堂、博文館の刊行書を、篠山吟葉が『多情多恨』と鏡花所蔵の『紙きぬた』を、それぞれ紅葉宅へ届けた。[紅葉「病間記」]

(17) 6・7 「国民新聞」(四面)の「十千万堂の出版物」で紅葉全集の概容と今後のことが報じられた。

(18) 6・10 紅葉は名古屋在の和達瑾(子)に全集をはじめとする自身の出版物の予定について発信した。[紅葉書簡414]

(19) 6・10 「読売新聞」(一面)の「よみうり抄」に十千万堂(出版部)のことが報じられた。

(20) 6・12 紅葉は吉岡哲太郎に「新著百種」の版権を問合せる手紙を送った。[紅葉書簡415・日録]／「二六新報」の挿絵担当富田秋香より、「換菓篇」第三(風葉作)の標題欄の絵(硝子金魚鉢ノ図)が届いた。[日録]

(21) 6・14 水葉が丸岡九華から「我楽多文庫」合集(九号—十六号)その他を借りて紅葉へ届けた。[日録]

(22) 6・15 紅葉は吉岡哲太郎夫人に、主人へ返事を促すよう依頼する葉書を送った。[紅葉書簡418]

(23) 6・16 紅葉は吉岡哲太郎からの返信に対し、改めて版権所有を確認する手紙を送った。[紅葉書簡419]／小波よりは、一二三館の件で来信(封書)があった。[日録]

(24) 6・16—7・19 風葉作「手梏足桎」が「二六新報」(一面)に断続掲載された。

(25) 6・18 鏡花は紅葉宅へ後藤宙外作「御信心」の原稿を届けた。[日録]

(26) 6・19 紅葉は風葉に「換菓篇」の原稿(「手梏足桎」)提出を督促した。[紅葉書簡422]

(27) 6・19 紅葉は宙外に「換菓篇」寄稿作(「御信心」)の礼を書き送った。[紅葉書簡423]

(28) 6・22 鏡花が安田善之助より託された『此ぬし』を持参した。[日録]／紅葉は小波へ「換菓篇」に武田桜桃と山岸荷葉の作を

謝絶するむね書き送った。［紅葉書簡376］　＊岩波書店版『紅葉全集』の発信月を訂正。

(29) 6・27　紅葉は宙外作「御信心」の引を草した。／思案より紅葉全集の見本組が届いた。［日録］

(30) 6・28　紅葉は宙外作「御信心」の引に訂正を加え、「紅葉全集ボオダア」の考案に耽った。［日録］

(31) 6・30　小波から「小説群芳」収載「初時雨」「紅懐紙」の版権についての書簡が届いた。［日録］

(32) 7・1　「新小説」に「時報 十千万堂」が載った。

(33) 7・4　紅葉は「換菓篇」（「手梏足桎」）の件で風葉を呼んだ。［日録］

(34) 7・8　紅葉は安田善之助に所蔵『三人妻』『七十二文命の安売』の提供を乞う手紙を送った。［紅葉書簡432］

(35) 7・25　紅葉は足達（立）疇郁に「紅葉全集」用の刻印とともに「換菓篇」の印を急ぎ着手するよう懇請した。［紅葉書簡439］

(36) 8・1　「新小説」の「時報」で、紅葉全集第一巻の今月中の刊行が予告された。

(37) 8・14　「読売新聞」（一面）の「よみうり抄」に紅葉全集の近刊と換菓篇第二のことが報じられた。

(38) 8・22―8・28　宙外作「御信心」が「二六新報」（一面）に掲載され、初回には紅葉の引が添えられた。

(39) 8・23　紅葉は石橋思案に『換菓篇』の校正の届かぬこと、紅葉全集の主任が泉斜汀であることを伝えた。［紅葉書簡444］

(40) 9・1　「新小説」に「時報 十千万堂出版部」が載った。

(41) 9・12　鈴木某が『換菓篇』の写真の件で横寺町を訪ねた。［日誌］

(42) 9・16―9・24　水葉は順次『換菓篇』収録の本文の校正に従事した。［日誌］

(43) 10・1　斜汀は紅葉全集編輯の用件で紅葉を訪ねた。［日録］

(44) 10・2　博文館の内山正如が『換菓篇』表紙の件で紅葉を訪ねた。［日録］

(45) 10・19　博文館の内山正如が『換菓篇』の刷上りを持参し、水葉が肖像、奉贈文や序などの前後を校正した。［日誌］

(46) 10・22　「換菓篇」の「第二」を出版するという話が出た。［日誌］

(47) 10・24　『換菓篇』の見本が届けられた。［日誌］　＊『換菓篇』初版の発行日。

(48) 10・25　「換菓篇」の「第二」の相談があった。［日誌］

(49) 10・28　『換菓篇』五十部が届けられた。［日誌］

(50) 10・29　水葉は紅葉の指示で『換菓篇』五十部の発送作業をした。［曲浦筆記「水葉君の話」「卯杖」11号、明36・11・25］

＊10・30　紅葉逝去。

(51) 11・1　「二六新報」（一面）に紅葉逝去の報とともに「換菓篇成る」が載った。＊『換菓篇』再版（11・7）以降、この日を初版発行日とする。

(52) 11・6　「二六新報」（三面）に「十千万堂の経営」が載った。

(53) 11・10　「読売新聞」（一面）に「新著梗概 換菓篇（紅葉山人門下生編）」が載った。

(54) 12・1　小波の「換菓篇」の「第二」について語った「紅葉山人追憶録 第一」が「新小説」に載った。

明治三十七年

(55) 1・1　小波と岡田朝太郎の『紅葉全集』のことについて語った「故尾崎紅葉君追慕演説」が「新小説」に載った。

(56) 1・1　「文芸倶楽部」に「時報 紅葉全集の発梓」が載った。

(57) 1・18　十千万堂蔵版『紅葉全集』第一巻が博文館より刊行された。

右のごとく、事の動きとしては「換菓篇」の企画のほうが後発になるが、一連の筋がたどりやすいため、まず刊行にいたる経緯をまとめておく。

本書の成立に関しては、すでに田中励儀氏に二篇の論考（㈠「薬草取」覚書」『泉鏡花文学の成立』双文社出版、平成九年十一月二十八日。㈡「小栗風葉「手梏足桎」と〈換菓篇〉」「同志社国文学」八十一号、平成二十六年十一月二十日）があり、委細をほぼこれに従い、補足をしつつ述べてみる（以下、（　）付番号は右事項一覧の通し番号と対応する）。

三月二十五日の泉鏡花宅での最初の門生の相談会（3）のあと、二十八日に小栗風葉は紅葉宛に、京都在住の同門中山白峰からの書信を伝える次のような書簡を送った（4）。

本日白峰子より書面到着仕候処、非常に心痛罷在候趣、御容体によりては、早速出京可仕に付、打電致しくれ候やうにと申越候間、御近状詳しく申述べ、さやうに心配には及ばぬやう申遣し、次手に例のデヂケエションの出版の件も相洩し来月十五日原稿〆切の上、御家族始め門葉一同いづれへか御湯治の御供可仕に付若し出京相成候はゞ、其頃を期してと相勧め申候（…）白峯（ママ）子もとにかく念晴し旁上京可然（しかるべく）と被存候（廿八日）

本簡は、四月二十二日付「二六新報」連載「不養生誡」の第十一回（三面）に、その「三十三」として紅葉が書写し公表したものであり、この時点では「デヂケエション」とのみ記され、「換菓篇」の題名はない（なお、前記田中氏は㈡で、発信を「四月」としているが、末尾の「廿八日」は、新聞掲載日から考えて「三月」とすべきであろう）。四月に入って十四日に、紅葉が風葉を呼んだ際の「日録」（5）にも「デチ（ママ）ケエション」と記されているから、この日以降、五月十一日に「二六新報」へ「換菓篇」の社告（6）が出るまでの一と月足らずの間に、題名が具体化したことになる。

前節（「四 晩年の旅行」）にも述べたごとく、紅葉は四月二十三日から喜久夫人、長男夏彦とともに銚子へ療治に出かけ、二十六日には、鏡花、風葉、柳川春葉、徳田秋聲の四天王に加え、中山白峰も風葉書簡に記されていた通り、京都から参じて、五月早々（一日あるいは二日）に帰京した。師弟ともどもの療養の旅のうちには「デヂケエション」の件も当然話題にのぼったことであろうが、題名が決定した経緯の詳細は不明である。

「換菓篇」の企てを公表した「社告」（6）には「氏の門下に在りて誘掖の恩を荷へる文士十数氏相謀り多年の師恩に酬いんが為めに各〻心血を濺ぎたる小説又は随筆を作りて氏の牀下に奉贈（デジケエション）し名（なづ）けて『換菓篇』といふ」との前書に続いて、鏡花以下十六名の作品を列挙したあとに「蓋し是れ文壇未曾有の佳話伝へて以て百世に貽（のこ）すに足れり」との言葉があった。

この「社告」と同日の「東京朝日新聞」報（7）の表題もまた「文壇佳話『換菓篇』」であり、

小説家の泰斗尾崎紅葉氏が難治の病に罹り一命風前の燈火よりも危しと聞て満都の士女涙さしぐまざるはなく（…）斯く月日のうつり行くは同氏の死期の近づくものにて愈（いよ）く哀れを添ふるものから多年同氏の薫陶を受けたる門下

生の心づかひは夫よりも百層倍にて食ふ物も味はひなく唯歎息の声を漏らすのみなり左れば鏡花、風葉等諸氏は何をがな先生に呈し病苦を慰め参らせんと兎つ置いつ思案の末短篇小説、随筆、紀行文等己がし〻(ママ)得意の手腕を揮ひ之を一冊に取纏め『換菓篇』と題し同氏の枕頭に贈りたるは此原稿料を以て病気見舞の菓子に換る意(こゝろ)なりとぞ（…）発行以前に両三篇を二六新報に掲げんものと氏は病床に打臥しながら紙上に掲載すべき分を撰択したりと伝へ聞きぬ襟も自(おのつ)と正さるゝ文壇の佳話と謂ふべきなり

と報じている。

田中励儀氏は「当初、十六作品を予告していたのにもかかわらず、結局、鏡花・秋声・風葉・宙外、計四作品のみで打ち切りとなった〈換菓篇〉シリーズは、企画倒れに終わった印象が強い」（前記㈠の論考）としているが、右記事にあるごとく、社告に掲げた十六篇のすべてを順次「二六」紙上に掲載するのではなく、「発行以前に両三篇を二六新報に掲げん」とするのが紅葉の意図であったとすれば、所期の目的は十分に達せられたといってよいのではあるまいか。先の社告はしたがって、今後掲載する作品の「予告」ではなく、強固な師弟関係を俟ってはじめて可能な「換菓篇」という企ての全容を知らしめる「広告」であった、と解されるのである。

さらにもう一報、同日の「報知新聞」（8）も、紅葉の入院先を「赤十字病院」と誤ってはいるが、「此程より鏡花、風葉、春葉の数子は互ひに相談の上各一篇の小説をものして」「开(そ)を換菓扁(ママ)と題してまづ師の枕辺に献ぜしが追ては某書肆より出版し其潤益を以て師が薬餌の料とする筈なるが」、これを「二六新報」紙上へ掲げるに当っては、

病骨を買はれし知巳［己］に酬ゆるの道なきに苦しみしがせめては門下の起草せし同小説中の二三篇を同紙上に掲げて平日の厚意に応へんと同社に申し送りしに同社は开(そ)は門下諸子が本意を無にするの道理なればと固く辞せしも再応の書面に接してその上此意を抂げては却りて心を煩はさんと此の望みの如く同紙上に掲ぐる事となりたりといへり

と、「東京朝日新聞」に同じく「小説中の二三篇を同紙上に掲げ」るとし、さらに掲載に至った経緯にいささかの綾を加えた内容を伝えている。入社したものの捗々しい創作を載せられぬこと心苦しく、新聞社の「平日の厚意に応へん」とするため、門生の作を掲げるというのである。「固く辞せしも」云々には、確実に掲載できる作品が得られるかどうか、新聞社側の躊躇を看て取ることさえ可能である。この経緯の事情を窺いうる資料は確認できていないが、いずれにしろ、当の「二六新報」のみならず、同日付の他二紙の報道によって、「換菓篇」の挙は広く周知されたといってよいだろう。

風葉書簡にあった「原稿〆切」の五月十五日には、おそらく当の風葉をはじめ原稿はなかなか集まらなかったと思われるが、五月十六日から三十日まで鏡花の「薬草取」（11）が、六月一日から十五日まで秋聲「ゆく雲」（13）が、それぞれ順調に掲載された。

そのあと三作目の風葉「手梏足桎」（24）は、田中氏（前記㈠の論考）が報告しているように「六月十六日から始まり七月十九日に完結するが、その間十八回も休載している。連載期間中、半分以上休載というていたらくだった」。紅葉が六月十九日に、原稿の督促とともに、絵組みを挿絵担当の富田秋香（本名雄太郎）へ送るよう指示した書簡（26）に続き、七月四日に風葉を横寺町へ呼んだ（33）のは、度重なる休載に業を煮やしたため

である。

万事にルーズで師匠へ迷惑をかけ、またそれゆえに紅葉から愛された風葉であったが、この休載の理由の一斑は「風葉の身辺が多事となったため」（岡保生氏『評伝小栗風葉』桜楓社、昭和五十年十二月二十五日）、すなわち六月十日に長男が生れたことに因る。連載開始の翌日、十七日の「十千万堂日録」に、

午前風葉生昨日帰京せりとて来訪す。其子に丈夫と名（なづ）く。

とあり、紅葉が名付親になった長男の出生は、のちに風葉みずから、

丁度其頃妻が妊娠中で総領が生れる矢先だから、小供と云ふものでは余程神経を労して居た、何うしたら係累に煩はされずに益々発達して行けやうかなぞと云ふ事を始終考へて居たゆゑ、自然あんな趣向が浮んだものと見える。

（「作物とモデル」「新潮」五巻四号、明治三十九年十月十五日）

と述べているごとく、「余程神経を労して居た」ゆえに休載を招いたのだったが、それはまた同時に創作の動因でもあったのである。

こうして、三作目に遅延は生じたものの、五月十六日から七月十九日まで、「換菓篇」の「発行以前に両三篇を二六新報に掲げん」（前記「東京朝日新聞」報）とした企図は、鏡花、秋聲、風葉の三作をもって一応果たされたわけだが、さらにもう一作、五月十一日の社告に無いものの掲載があった。

風葉作の完結後一と月余り経った八月二十二日より一週間で完結した後藤宙外の「御信心」である（38）。門生ではない宙外の作には、連載第一回に「紅葉散人（ママ）拝記」とある「引」が添えられていた。

宙外の原稿はすでに鏡花を介して、風葉作の連載が始まってから三日後の六月十八日に紅葉のもとへ届けられており（25）、翌日には「換菓篇御寄贈被下御芳情難忘、千万奉感謝候」とした礼状を認め（27）、二十七、二十八日にかけて「引」を完成させている（29）（30）。「後藤宙外君は、吾が藻社一列の篤く交りて、素（つね）に兄事する所也。君換菓篇の挙有るを聞くや、則ち諸生と憂を同うして、懇に枕上一篇の贈を賜ふ。其の情の密に、其の誼の高き、自ら揣（はか）るに、当らざる万万なり。」と始まる「引」は、礼状と同意である。

「散文詩の精髄を論じて美妙、紅葉、露伴の三作家に及ぶ」と題する卒業論文（『後藤宙外 目で見るその生涯』後藤宙外翁顕彰会、昭和五十五年十月三十一日、による）を書いて明治二十七年に東京専門学校を出た宙外が、主宰する「新著月刊」の「作家苦心談」筆録のため横寺町を初めて訪問した後、頻繁な出入りをするようになったのは「明治三十一年の夏の頃であった」（『明治文壇回顧録』岡倉書房、昭和十一年五月二十日）という。爾来紅葉自身よりも、むしろ門下生、とりわけ筆頭鏡花の進境を拓き、弟子たちの「兄」たる存在として親交を深め、三十二年末に「新小説」の編輯主任となってからは、先に入社していた春葉に加え、編輯局に鏡花や風葉を迎え入れて、彼らの活躍の場を調えもした。内田魯庵（『きのふけふ 明治文化史の半面観』博文館、大正五年三月五日）は宙外を「硯友社の客将」と称しているが、彼が「「換菓篇」の殿（しんがり）」（「御信心」の「予告」「二六新報」明治三十六年八月二十一日付・一面）の役割を務めたのは、紅葉の厚い信頼とこの献呈集を発起した門生たちとの親昵を証すものである。

宙外「御信心」連載中の八月二十三日付石橋思案宛の紅葉書簡（39）には「換菓篇校正は今だに参らず如何に致候事にや一寸活版所の方へ御問合

せ被下度候」とあって、すでに「換菓篇」の原稿が博文館へ渡り、校正の段階に進んでいることが判る。「活版所」は刊本の奥附にしたがえば「東京築地活版製造所」である。

さらに、九月中旬以降の校正の進捗や上梓までの経緯は、当時紅葉宅の玄関番をしていた山里水葉筆記の「十千万堂日誌」によって窺うことができる。

この「日誌」は紅葉晩年の友人加賀豊三郎（号翠溪）旧蔵、現東京都立中央図書館蔵で、翻刻（木谷喜美枝氏『尾崎紅葉の研究』双文社出版、平成七年一月十八日）もなされている。

勝本清一郎は本「日誌」について、「未発表のまま戦災で焼けたが、戦前、私がその全文の副本を作って置いた」（「尾崎紅葉」『近代日本の文豪Ⅰ』読売新聞社、昭和四十二年七月十日）と述べているが、水葉の印の捺された原本は、戦時中に他の厖大な黄表紙洒落本のコレクションとともに東京都が「戦時特別買上図書」として購入し、埼玉県志木町等へ疎開保管され、都立日比谷図書館での整理が終った昭和三十六年四月に「加賀文庫」の目録が完成し、一般公開されていた。したがって、「戦災で焼けた」云々とは、おそらく買上げ以前に加賀から原本を借覧して副本を作製した勝本が、自らの副本の価値を高からしめるためにした訛言であろう。公開から六年後になおこのような言をなした理由は不明である。

もっとも、この「日誌」は買上げ以前に、必ずしも存在が知られていなかったわけではなく、紅葉歿後十三回忌の年、大正四年十二月五日―八日、三越呉服店で開催された「紅葉山人遺品展覧会」に出品されており、加賀豊三郎の出品全十七点のうち、

一　十千万堂日誌（門生山里水葉氏筆録）　一

との記録（「遺品目録」「三越」六巻一号、大正五年一月一日）が存するので、この大正四年の時点で「十千万堂日誌」は加賀の所蔵に帰していたのである（なお、昭和四年十一月三十日―十二月六日の三越ギャラリーでの「紅葉山人二十七年忌記念展覧会」にも同様の出陳があった）。

さて本「日誌」は、明治三十六年九月六日より紅葉逝去の前々日十月二十八日にいたる記録である（以下、「日誌」からの引用は、翻字の改行を適宜追込んで記す）。

「換菓篇」のことが最初に出てくるのは九月十二日で、「鈴木某（換菓篇写真の件）」と記されている（41）。「鈴木」は名を明らかにしないが、「写真」とは刊本の冒頭に収められた「小川一真製版」とある「紅葉山人 発病一箇年後之像」のことか、九月二十三日に「小川写真や」と記されている条との関係が考えられる。続いて十六日に「換菓篇の出獄（秋声）の校正終る」とあるのが校正に関する記事の初出である。「出獄」は六月に連載した「ゆく雲」の改題。同日には「今猶校正中の者くさ紅葉、新にノオトル　ダアム、風葉兄よりアンナカレーニナの訂正来る煙霞療養の校正は中絶」と、「換菓篇」以外にも四冊分の校正が記されている。次いで十七日には「白峯君の花見車校正（換菓篇）以下凡て受持ち也」とあるごとく、各々校正の「受持ち」を決めて分担していることが判るが、「薬草取」には鏡花の朱筆の入った校正刷（再校）が残っている（「編修資料目録」岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二、平成十八年一月二十日）から、当然ながら作者自身で校正したものもあった。

以下、日ごとに列挙すれば、十八日は「花見車」と新井雨泉「異形」、

鈴木苔花「馬」、「出獄」（再校カ）、十九日は「出獄」（同）、二十一日は「馬」と「異形」、二十二日は篠山吟葉「霊薬」、篠原嶺葉「青切符」、田村西男「入営祝」、二十三日に「入営祝」と水葉自身の「世相」、二十四日に「校正」（作品名不明）とあるのを最後に記載は無くなる。

翌月になって「十千万堂日録」十月二日の条（紅葉はもはや筆を執る能わず、篠山吟葉の筆記といわれる）に「博文館内山氏雨中来訪、換菓篇表紙の件」（44）と記されているのに続き、「日誌」の十九日には（45）、

換菓篇刷上りて博文館の内山氏持参
御肖像や奉贈文序などの前後を正す
先生は物言はずお苦し気にて其刷
上りを其時見給はず予の許に保管

とあり、校正を終えてようやく「刷上り」が届けられた。これを届けた「博文館の内山氏」とは、内山正如（号幻堂。慶応元年九月十五日生、大正十一年九月二十六日歿、享年五十八）。創業以来の社員で、博文館の単行出版の嚆矢『日本之輿論』（明治二十年七月〔国立国会図書館蔵本は発行日記載なし〕）の編者となってから、『支那歴史一千題』（「通俗教育全書」第五十二編、明治二十六年二月九日）、『就学案内』（「日用百科全書」第三十七編、明治三十二年四月二十一日）をはじめ、同館蔵版の編著書も数多く、編輯局、出版部を経て、三十六年当時は営業部の副支配人を務めていた人物である。この博文館歴々の社員が『換菓篇』の出版に関わっていたことは銘記しておくべきであろう。

刷上りが出来てから五日後二十四日の「日誌」（47）には、

換菓篇の見本来るけふ発行日なるが袋の為二日間延引

とあり、この日を「発行日」とすることが裏付けられるとともに、「袋」＝カバーの不備のため、さらに完成の遅れたことが判る。山梨大学附属図書館（近代文学文庫）蔵本で確認すると、このカバーは扉と同一の図柄、地色も扉の書名の字と同じ桃色の単色で、字を白抜きにして扉との対照を意識させるデザインである。岩波書店版『紅葉全集』第十二巻の須田千里氏編「著書目録」では、五版（明治三十六年十二月二十二日）に、右肩へ「五版」と印したカバーがあるむね注記されているが、初版にもカバーは付いていたのである。扉の意匠は、右下のサインから斎藤松洲だと知れる。同じサインは本体表紙絵の看護婦像の左下にも認められるので、『換菓篇』の装丁者を斎藤松洲とすることが可能だろう。なお、七月二十五日に足達疇邨へ依頼（35）した「換菓篇」の刻印は、各頁の通し柱（見開き頁の左右両端）に用いられている。

水葉が『換菓篇』と同時に校正を進めていた富山房版『草紅葉（草茂美地）』は生前に間に合わず、逝去から半月後の十一月十五日に「紅葉山人遺著」として刊行された。この『草紅葉』もまた松洲が装丁したもので、版元が異なり、頁数（『換菓篇』二九二頁、『草紅葉』二〇二頁）にも差はあるが、カバーの仕様、五六判の判型、ともに同じであり、逝去の直前と直後に相ついで刊行された門生の献呈集とその師の遺著とは、最晩年の友人斎藤松洲の手になる一対の書物なのである。

さて、十月二十八日に届いた五十部の『換菓篇』は翌二十九日に発送された。発送の模様は曲浦筆記「水葉君の話」（50）に詳しい。この筆記は、歿後「卯杖」の紅葉追悼号に載ったもので、同誌目次には「臨終前の事

山里水葉」と出ている。九月二十八日までの日次の「十千万堂日誌」の末尾に、紅葉逝去後に書かれた「御臨終前後」と題する覚書があるが、その冒頭に「予が卯枝(ママ)に掲げし（御臨終前の事）より後の事を記す」とあるから、（50）と「日誌」末尾の覚書とは前後連接することになる。

やや長いが、以下に発送作業の部分を引いてみる。

翌日〔十月二十九日・引用者注〕は大変御気分が好く、お医者に来て頂かなくともといふ電話を懸けた位です。午頃(ひるごろ)は殊にお宜しくて、午前に博文館から来た五十部の換菓篇を発送すると被仰(おつしや)って、上包などを買に行ったのが一時頃です。前日右の本を差上げる方を調べた処が百二十余名もあって、本は五十部なのですから、地方へ先に送ると被仰って特に五十名をお選びになったのです。扉の右に拝贈何某と書いて、左の下に紅葉散人といふ疇村さんの刻(ほ)った御印を捺すのです。御自身になさるお意(つもり)で色々お躰の位置をお直しになりましたが、どうも局部がお痛みになるやうで、到頭お止めになりました。私に書けと御命令でした。いつもの字で宜しう御座いますかと伺うと、可(よ)からうとお笑ひでした。（…）名古屋の杉野大人和達夫人此お二人のを書いて御覧に入れたのが最後です。

後年、紅葉の偽筆を売ったといわれる水葉は、この時、師の公認を得て『換菓篇』の署名の代筆をしたことになるのだが、前日に届いた本を翌日「午前」に発送する段となり、「百二十余名」から「地方へ先に送る」五十名分を選んで足達疇邨の刻した印を扉の右肩に捺し、水葉が代筆して、名古屋の杉野喜精と和達瑾を最後に発送を終えた。刊本冒頭の紅葉肖像写真の右下にも疇邨刻の「化及我」の印が捺されているから、通し柱の「換菓篇」と併せ、五十部の贈呈本には都合三種の疇邨作の印が存していたことになる。

かくして三月二十五日の相談会あってより七か月余、紅葉はこの門生による献呈文集を逝去の前日に、地方の知己へようやく送ることを得たのだった。

水葉が地方へ送る五十名の最後を和達瑾としたのは、彼女が紅葉にとって格別の存在だったからである。

和達瑾（明治十二年生、昭和四十二年十一月十九日歿、享年八十八）については、すでにいくつかの文献（一）塩田良平「金色夫人を訪ねて」中央公論社版『尾崎紅葉全集』「月報」一号〔発行年月日記載なし〕第一回配本第六巻の刊記は昭和十六年六月三十日。（二）和達清夫「金色夜叉のころ」「文芸春秋」四十三巻二号、昭和四十年二月一日。（三）内田亨「「婦系図」のモデル」「学士会会報」六九三号、昭和四十一年十月十五日。（四）助川徳是「「紅雪録」「続紅雪録」考」「文学」五十一巻六号、昭和五十八年六月十日。（五）宮下拓三「『婦系図』ノート―「河野家」に関する新資料―」「静岡近代文学」七号、平成四年八月二十二日）があり、とりどりに事歴を明らかにするものだが、本人が生前の紅葉から与えられた「香草女」の号で発表した文章（六）和達香草女「尾崎紅葉の思い出」「婦人朝日」四巻九号、昭和二十四年九月一日）があるので、以下これを中心に先行文献を参照しつつ生涯を略述してみる。

静岡の軍医内田正の次女に生れ、上京後、お茶の水の東京高等女学校を明治二十八年、結婚のために四年で退学、夫の和達陽太郎（工学士。明治元年十一月八日生、大正十年三月十五日歿、享年五十四）が大学予備門で紅葉と同期だった縁もあり、瑾は「金色夜叉」を愛読し、周囲から「金色夫人」と称されるほどだった。明治三十二年秋、夫の任地名古屋の「中京新

報」に在籍していた石橋思案を訪ねた紅葉は和達家にも立寄り、以後の親交をいっそう厚くした（この三十二年秋の名古屋行きは、現行紅葉の年譜等では確認できない）。

和達陽太郎は名古屋電話交換局長を務め、飯田巽の次女やま子（山満子トモ。紅葉宅へ出入りした飯田旗郎の妹）の嫁いだ杉野喜精（名古屋銀行支配人）ともども、紅葉との交際を続けていたのだった。明治三十五年一月末、「新小説」誌特派員として泉鏡花、柳川春葉の両名が名古屋へ赴いた際には、和達家へ鏡花を、杉野家へ春葉をそれぞれ泊めて懇ろな世話をしたので、鏡花がのちに瑾およびその生家静岡の内田家を素材にして、「紅雪録」（明治三十七年三月）や「婦系図」（明治四十年一月―四月）をものしたことはよく知られている。鏡花はまた「火の用心の事」（大正十五年四月―五月）でも、彼女が上京したおりの出来事をつぶさに回想するところがあった。

その和達瑾へ宛てた明治三十六年六月十日付の書簡（18）には、当時進行していた出版企画が記されていて貴重である。

其内二六新報紙上へ病音［骨］録を出し、去る三月十日（ママ）の夕、死の宣告を受けし時の顚末を写し候を第一に掲け候間、御覧被下度、命もあらば此世にて御目もじ可致、近く肖像入絵はかきこしらへ申候間、二三葉進呈可致候。猶又追而換菓篇も出来、草もみぢも出来、句集も出来、全集（一巻五百ペエジ、全六巻、本箱付）も出来、硯友社のデヂケエションも出来、小生も死花の咲く事、いと〳〵うれしく御坐候。

〔圏点は原文。［　］は引用者の補正〕

見る通り、「二六」紙上への「病骨録」掲載の予定、「肖像入絵はかき」の作製、「換菓篇」「草もみぢ」「句集」「全集」「硯友社のデヂケエション」の「出来」の予定が列記されている。うち刊行が成ったのは『換菓篇』のみ、他は歿後の刊行、あるいは未刊に終ったものだが、このとき実にこれだけのものが紅葉の周囲で同時に企図されていたのである。

とりわけ注目されるのは「硯友社のデヂケエション」で、この書簡の三日前「国民新聞」の「十千万堂の出版物」（17）において全集の発刊を報じた中に「尚ほ発行所は十千万堂と名づけられ全集の外、換菓編（ママ）、交友より氏に献ずる物、並びに今後氏が筆を取るあらば其所作をも出版する筈なり」とある「交友より氏に献ずる物」がこれに当る。

さらにこの件について触れた小波宛の書簡（28）があるので、次に引用する。

扨桜桃君小説の儀は先々より小生に意見有之と申候は、第一の換菓篇は小生の門人の作を集めたるもの、第二のは友人の作を集めたるものなるに友人ならざる桜桃君を一名加へ候事は集作の主意に悖り候事と相考へ候（…）右様の訳故荷葉のは至急御断り被下度候、他の筆者は皆友人なるに、桜桃君一人友人ならざる後輩の作を加へ候事、いかにも異様に相見え候

〔傍点は引用者〕

友人による「換菓篇」に原稿を寄せてきた武田桜桃と山岸荷葉の作を「主意に悖り候事」とて謝絶する内容である。本簡の全集への収録は『文豪書簡紅葉より小波へ』（手紙研究会、大正九年十一月一日）からの転載で、日付を三十六年三月二十二日とするが、一覧にも記したように、紅葉宅で十千万堂出版部の最初の相談のあったのが三月二十三日（2）であり、これより前に「換菓篇」の名を記した書簡の存することはあり得ないので、発信は「三月」ではなく「六月」とすべきである。「三」と「六」とは、しばしば見誤られる例が多いし、六月二十二日付とすれば、先引、今後の刊行書の

予定に触れた六月十日発信の和達瑾宛書簡とも連繋が取れるからである。

このあと、八月に入って「よみうり抄」(37)に、

十千万堂より出版する筈の紅葉全集ハ既に編輯の歩を進め近日発刊さるべく換菓篇其れに次いで出づべく、又巌谷小波、江見水蔭、広津柳浪等諸氏が特に紅葉氏の為に物せし新作を集めし著書も出版さるべしと

とも伝えられているのが、管見、門生のものに続く、友人による「第二の」「換菓篇」報道の最後である。

紅葉が小波宛に記した「第二の」「換菓篇」のことは、当の小波自身が紅葉の歿後に、

彼(あ)の換菓篇友人の作物なども私が引受けて居つたですが、死ぬ前に早く見たいと言つたけれども中々皆なのが書けない、北里君のが一番早く来ました、私も書いたがもう見もしなかつた、筋だけ話したらそれは面白いからやつて呉れと、到頭見せずに死んだのは実に残念であつたです。

(「紅葉山人追憶録 第一」)

と述べているのに明らかである。「北里君」とは「十千万堂日録」にもしばしば来訪来簡が記されている北里闌(たけし)(熊本出身。北里柴三郎の従弟。明治三年三月三日生、昭和三十五年五月二十日歿。享年九十一)のことではないかと思われる。同志社と国学院に学んだあと、独逸に留学、帰国後の三十六年四月、紅葉の斡旋で春陽堂より『脚本こゝろ』を刊行している。国学院では高崎正風の門に入り、龍堂と号して和歌をよくした。「一番早く来ました」とあることからして、北里が寄せたのはおそらく和歌であったろう。かくて「友人の作物」の寄稿は北里闌と小波のもののみに止まったのである。

また、水葉「十千万堂日誌」の十月二十二日(46)以降、数日にわたってみえる記述のなかでとりわけ重要なのは二十二日に第二換菓篇の「題目を御病床に就ての感にとる事となれり」とある条で、小説中心であった門生の第一「換菓篇」の経緯をふまえ、知友による「第二」のそれは、ここに至って、より「題目」をしぼった文章を集めんとする企図となったことが判る。

しかしこれが「中々皆なのが書けない」(小波)結果、ついに未刊に終ったのは是非もなかった。というのは「友人」とする以上、「よみうり抄」に報じるごとく、少なくとも硯友社の主要なメンバーの寄稿を需めなければならないにもかかわらず、硯友社同人のうち、当時紅葉の近くにいた者は、巌谷小波、石橋思案、岡田虚心などに限られており、他の同人との交りはほとんど絶えてしまっていたからである。

こうした疎隔はこの時に至ってはじめて生じたのではなく、すでに二年前の明治三十四年九月三日付、在独の小波宛には、

病気前より虚心に不逢候、桂舟は後園を広く借り秋草沢山に栽込み市隠気取にて毎日なまけ居候様子眉山は一度も会ひ不申候、柳浪にも同断、江見には絶て。

とあり、その半年後の三十五年三月十七日付でも、

いかなる縁か近来岡田氏と別懇に相成折々会飲致し候へども旧硯友社員とは打絶えてさやうの遊興無之、川上は流人の如く、広津は隠居の如く、江見は勘当の如く、皆々何となく疎遠に相成り

と、重ねて「旧硯友社員」との「疎遠」を喞っている。

周知のように、眉山もまた柳浪も、日清戦争以後、とりわけ明治三十年代前半にかけて、いわゆる硯友社的、紅葉的なるものからそれぞれの方向へと離陸することによってみずからの立脚地を見出さんとしてきたので、紅葉との疎隔が生じたのは当然であったろう。小波や思案など小説創作の現場を離れた者たちが紅葉の近くに居て、その病床を慰藉していたのだった。

最も心を許した小波が遠く独逸に在ってはその歎きも増したのだろうが、しかし病気の不安を考慮しても、文学上の役割を終えて久しく、すでに解体してしまっている硯友社へなぜかくも拘泥するのか、その不審を解くには、今のわたしたちが硯友社に対して抱いているイメージと紅葉の思いとが違っていたと考えるほかない。

この点について、つとに岡保生氏は、硯友社がたんに文学結社ではなくして、遊興も含んだ「仲よしクラブ」であり、「吉凶禍福なにかにつけてかれらは集まり、友情を温めあった。」（『明治文壇の雄尾崎紅葉』新典社、昭和五十九年十二月十日）と述べていた。右の指摘をふまえれば、硯友社という集団は、紅葉にとって文学上の問題であるよりも、日々の生活においてその交遊が維持継続されるべき朋友組織だったわけである。日清戦後の文学の方向の違いはあれ、名実ともにこの組織の総領であった彼にとって、社員との疎遠は堪えがたいことであり、先の小波宛書簡の嗟歎はここに発し、かつ自身の創作の停滞と病の進行とがそれを倍加させた、としてはじめて紅葉の拘りに得心がゆくのである。

かくして「硯友社のデヂケエション」、「友人の作を集めたる」「第二の」「換菓篇」は、「題目を御病床に就ての感にとる事」と限定したにもかかわらず、刊行に至らなかったのだった。

刊本として今に残った門生による『換菓篇』のほかに、もう一つ、実を結ばなかった「換菓篇」の企画があったことを、紅葉最晩年の重要な動静として記録しておきたいと思う。

以上「換菓篇」関係の経緯をたどり終えたところで、あらためて三十六年三月の大学病院退院直後の時点に立戻り、十千万堂出版部の活動を逐ってみたい。

退院から四日後の十八日の「十千万堂日録」（1）に、

川喜多氏（ブダウ酒ビスケット）佃嶋にて白魚をとらしめ持来らんとせしが血をあらすと母にいはれて止みぬとぞ。

十千万堂出版部創立の件にて来る。

とあるのが、出版組織としての十千万堂の始発となるが、右にも明らかなように、この「創立」を発起したのは、硯友社の旧友小波や思案ではなく、秋聲会の俳誌「卯杖」（明治三十六年一月創刊）の出資者川喜多不曲であった。

岡田朝太郎（虚心）は紅葉の歿後に、胃癌の宣告を受けて以後の尾崎家内のことはひとまず措いて、「公けの方面のことは、どう云ふ風な方針を取るべきものであらうか、此相談が始まりましてから、最も熱心に、又最も適当なる案を提出されましたのは、故川喜多君であります。第一、十千万堂と云ふ堂号を其儘用ゐて永久の文学上趣味も利益もある、一つの紀念物を創設しやう（ママ）ではないか。而（さう）して其紀念物の第一に遺るべき事柄は、紅葉君の著作を蒐めると云ふ、所謂全集を拵へると云ふこと」を提案し一同

それに賛成した、と述べている（「故尾崎紅葉君追慕演説」「新小説」九年一巻、明治三十七年一月一日）。岡田が「故川喜多君」と言ったのは、不曲が紅葉に先立って八月五日に逝去していたからである。訃報（「時報」「新小説」八年十巻、明治三十六年九月一日）には、

川喜多不曲氏逝く　京橋区築地南小田原町二丁目の質舗川喜多嘉兵衛氏は平生慈善公共に力を盡し兼て文雅の嗜み深く徳行の君子人として知友の間に重んぜられしが七月廿七日俄然急激なる肺患を得医療の効なく八月五日長逝せり享年三十三、築地本願寺内勝林寺に葬る各文士の会葬する者頗る多かりし

として、小波の「涼み台昨日は君の居ませしに」はじめ十氏の追悼句を掲げている。岡田朝太郎宛に「不曲子の死は頗る人を驚し無常迅速の世を観ぜしめ候事更に深く御座候」（八月八日付）、と書き送った病褥の紅葉はむろん葬儀に列することはできなかった。のちに「卯杖」の後継誌「木太刀」を主宰した星野麥人もまた「不曲氏を惜むの情は全くその経済上の特志で、富めるものなれども志いやしからずといふ芭蕉の言葉に適応する思ひ出を持たれる人であつたのでした。」（「紅葉先生」「木太刀」三十七巻十号、昭和十四年十月二十日）と悼んでいるが、この「特志」の現れが十千万堂出版部の発議となったのである。

三十六年五月十四日付の小波宛書簡（9）は、全集編輯のため『南無阿弥陀仏』の版元大阪駸々堂との交渉を指示した内容で、文中、

世話人七名にて尽力いたし十千万堂出版部建設の趣意くはしく先方へ御示し被下やう願入候

とあり、出版部の「世話人七名」だったことが知られるが、この「七名」とは、発起人川喜多不曲のほかに誰であったのか。右書簡の初出『文豪書簡紅葉より小波へ』（前出）の頭注には、

世話人には、硯友社同人と、高田早苗、長田秋濤の二氏も加はつてゐたと思ふ。

とあり、「国民新聞」六月七日付（四面）の「十千万堂の出版物」（17）には、

尾崎紅葉氏が病容易に治すべからざるものあるを以て氏が交友岡田朝太郎［、］巌谷小波、石橋思案、武内桂舟の諸氏相謀り氏が作物の全集を発刊せんとの儀あり

と出ている。

以上から、硯友社同人の石橋思案、巌谷小波、岡田朝太郎、武内桂舟の四名に加え、高田早苗、長田秋濤、そして川喜多不曲、この七名を「世話人」とすることが可能ではないかと思う。

こうして発足した十千万堂出版部の仕事の中心は、先の岡田朝太郎が述べるごとく、「紅葉の著作を蒐め」た全集の編輯刊行にあった。しかし、過去の著作を蒐集する作業は七人の世話人をもってしても思うに任せなかった。

というのは、著作の版権譲渡が絡んでいたからである。紅葉と版権の問題については、すでに菅聡子氏に研究（『メディアの時代―明治文学をめぐる状況』双文社出版、平成十三年十一月一日）があり、委細を省くが、紅葉はこの時より二年前には、

小生は今年より印税法を取る事に致し手始めに文祿堂と約して着手致候（巖谷小波宛・明治三十四年三月十日付）

とし、さらにその一年後には、

近来幸田と共編にて西鶴文粋なるものを編成せんとの計画有之出来れば秋の出版に相成可申又春陽堂の方も金色夜叉完結後は印税法に由るやうに相成申候（同・明治三十五年三月十七日付）

と記して、「金色夜叉完結後」の「印税法」への転換を表明していた。しかし逆に言えば、これ以前の著作は印税法ではなく買取りだったし、「金色夜叉」は未完に終って、紅葉の生前に印税法をとることができなかったわけで、したがって旧作を全集の本文とするには、版元からの版権の譲渡または収録の許諾が必要だった。編輯作業の遅滞はかかってこの点に起因していたのである。

先の小波宛書簡（五月十四日付・(9)）もその一環であったのだが、一覧の（16）（20）（22）（23）は、紅葉の出世作「新著百種」の第一号『二人比丘尼色懺悔』をめぐるやりとりであり、前記『換菓篇』の担当であった博文館の内山正如から、「新著百種」の版権所有についての連絡が届いたのを受け、版権の譲渡を申し入れ、版元吉岡書籍店主人吉岡哲太郎の返事を待ちかねて、夫人宛に催促の葉書（22）を送っているほどである。

五月、六月の紅葉小波の往還（10）（12）（23）で話題になっていた書肆「一二三館」については、「新小説」九月号の「時報」（40）に、

全集は遠く色懺悔より近くは金色夜叉草分衣をも網羅する筈なるが其明治［治］二十年頃に成れる初紅葉（恋山賤駿馬骨以下三篇を収めたる小説）の版権所有者に交渉の必要起りたれども最初の所有者日本橋区鉄砲町一二三堂（ママ）は其後版権を他人に譲り今は何人の手に帰しゐるか分明ならざるため編輯者は昨今諸方へ問合せ中なりといふ

とも報じられた。右の「初紅葉」は正しくは『初時雨』で、「小説群芳第壱」として昌盛堂から刊行（明治二十二年十二月十日）されたのち、この版権を買った一二三館が『恋山賤』と題して再版刊行（明治二十九年四月二十八日）したが、「手続無之」「現存や否やも問題に有之」（(10)）の小波宛書簡）という状況を打開できず、結局「恋山賤」「駿馬骨」「江戸水」「口惜きもの」「文盲手引草」五篇の全集への収録は叶わなかった。

また初出の雑誌「小文学」（15）、「我楽多文庫」（21）等の借覧を硯友社同人広津柳浪、丸岡九華へ依頼し、六月四日には全集用の資料として、春陽堂、博文館の刊行書が届き（16）、その他不足のものについては、『多情多恨』『紙きぬた』（16）、『此ぬし』（28）、『三人妻』『七十二文命の安売』（34）など、門生知友の所蔵者に提供を仰いでいた。

版権問題の困難は以上に盡きるわけではないが、全集刊行の全体の枠組は、先の五月三十一日付小波宛書簡（12）の冒頭に、

昨日大橋氏来訪有之製本体裁の相談ほゞまとまり申候に就ては早速着手致度候

とあり、博文館の館主大橋新太郎との「相談」のまとまったことが判る。もってこの時を全集刊行の始発としてよいだろう。

翌六月四日付、大阪在の水落露石宛（14）では、

紅葉全集は十千万堂出版部（五六の親友相謀りて設立致しくれ候もの）より発行いたし候全部六巻三千頁余の者に相成毎月一巻づゝ発行の事に決定致し来月頃第一巻を出し可申候

と知友への体裁等の報告の段階に至り、これを承けて、六月七日付「国民新聞」の「十千万堂の出版物」（17）に、

全集は総数約三千頁之れを六冊に分ちて順次出版するものにして製本も極めて美麗なりと云ふ

と報じられたのが、管見新聞報の最も早いものである。

三日後の「読売新聞」（19）でも、

尾崎紅葉氏中心となり氏の別号を其のまゝ十千万堂と名づくる一社を創立し、文学書類を出版し行々ハ図書室をも設くる企てあり、其第一着として紅葉全書（ママ）を発行する由にて目下氏の作を蒐集しつゝありと

と報じられたが、「国民新聞」ほど具体的ではない。この月の二十七日には思案から見本組が届いて（29）、紅葉はただちに「紅葉全集のボオダア」の考案にかかっている（30）から、概容が六月中にはほぼ固まりつつあったと考えられる。

すすんで八月の「新小説」の「時報」（36）では、

『紅葉全集』第一巻はいよいよ本月中に出版せられん紙数凡そ五百頁にて定価一円位 全部六冊三千頁予約者は五円にて買ひ得べしと　〔圏点は原文〕

と、定価、予約出版等かなり具体的な内容が報じられたが、この月の刊行は実現しなかった。「六冊」「三千頁」は紅葉全集のいわば符牒となった感があり、当初紅葉書簡の七月から、八月になっても刊行が遅延しているのは、先に述べた版権問題により編輯が膠着していたためである。

書簡や「十千万堂日録」から窺いうる限りでは、巌谷小波と石橋思案、すなわち博文館のそれぞれ「少年世界」「文芸倶楽部」の主幹として編輯局に在籍していた両名が実務を担当し、館の社員では内山正如が『換菓篇』も含めて従事していたごとくであるが、八月二十三日付の思案宛の紅葉書簡（39）では、全集の「主任」を泉斜汀にする、と見えている。後日刊行された全六巻の各巻末には校訂者の名が記されていて、第二巻のみ「遺友 石橋思案 校」とあるが、残りの巻には「遺弟 泉斜汀 校」、最終第六巻に「門人 斜汀 泉豊春 校」と印されていることよりすれば、集めた本文を整え、校正をする「主任」として働いたのが斜汀であったとしてよいだろう。

「新小説」で八月中と報じられた『紅葉全集』は、『換菓篇』とは異なり、とうとう生前に間に合わず、歿後の十二月一日付の広告（「太陽」九巻十四号）では「来る十二月中旬の発行」と記されている。あたかも十二月十六日の紅葉の誕辰日に開かれた紅葉会（ノチ紅葉祭。この催しについては後に詳しく述べる）の席上、発起人巌谷小波は会の趣旨を説いた最後に、

序（ついで）ながら申上げますのは、矢張吾々友人が打寄ッて、十千万堂と云ふものを拵へました。其十千万堂と云ふのは、即ち紅葉君の堂号であります。其堂号を長く保存して、先づ第一着に『紅葉全集』なる故人の遺書をば、是から発刊することに致します。（…）諸君の御賛成に依って、益々此十千万堂の盛んになることを希望するのであります。此次第書の裏に予約の申込方法、或は

定価、体裁其他のことも書いてございます。能く之を御覧下さいまして、是も続々御申込あらんことを希望するのであります。（「故尾崎紅葉君追慕演説」「新小説」九年一巻、明治三十七年一月一日）

と述べるところがあった。「紅葉君の遺績をば何時迄も慕ッて往きたいと云ふ考（かんがへ）」（同前）から催された本会の参加者はすなわち紅葉文学の愛読者にほかならず、『紅葉全集』の「予約」申込の募集には、このうえのない機会であったにちがいない。

その内容を「予約出版広告」（「文芸倶楽部」十巻二号〈定期増刊ひと昔〉明治三十七年一月一日）から窺えば、「十千万堂出版部」による刊行の辞の全文は次のようなものであった。

麗、春日の如く、清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し、奇想縦横字々霊快を極めざるなし。曾て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、峻群英を養ふて藻社の名一生を壓す。山人が明治文学に寄与するの労天下の斉しく知る所にして、仰いで以て泰斗と為すは之が為め也。今や山人逝て、文苑頓に寂々たり。山人の逝くや命也。而も山人の精神は万古常に新也。蓋し山人の文章の如きは伝へて以て後代に貽し、長く河嶽に蔵すべし、則ち親朋同人相謀りて十千万堂を営み、凡そ山人が述作に係るものは其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧［璧］と為し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七宝の散りて点敷せるは聯ねて一環と為すの美に若かず、全集分ちて六、順を追ふて之を収め、謹みて江湖文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

その「全部六巻」「天下無双美本」と謳った内容は「◎菊判総クロース、表紙画金刷金文字入（桂舟氏筆）◎毎巻紙数八百五十頁内外○全六冊紙数約五千頁」、収録「四十三篇」。各巻の定価は「一冊金一円八十銭」「全部六冊十円八十銭」「郵送小包料金十五銭」である。全集の「予約募集方法」に二種があり、「甲種予約」は「金七円」を「一時払込」するもの、「乙種予約」は申込の際約束金として「金二円」を送金し、「残金六円九十銭」を毎巻発行の節「金一円十五銭宛」払込む、という方法であった。この予約期限は「二月十日限」、「期限後は断然正価に復す」としている。

先述、八月の時点での「新小説」の報にあった定価一円位、全部六冊、三千頁とは、冊数こそ同じだが、定価は一円八十銭、総頁四千五百頁、六冊合計で十円八十銭と、頁数の一・五倍増にともない、定価も約一・八倍となったことになる。

結局「十二月中旬の発行」との「広告」もまた徒となり、博文館からの十千万堂蔵版『紅葉全集』の第一巻は、年明けて三十七年一月十八日に発兌となった。逝去から二か月半余、十千万堂出版部発足以来十か月以上を要して刊行に至ったのだった。

巻首の「十千万堂出版部を代表する」小波・思案連名の四頁におよぶ「序」は、「前後二十年に垂んとするあひだの、君が著作の版権」をめぐる問題の説明に費やされ、刊行に至る経緯と版権を持つ各書肆の快諾に対する謝辞、とりわけ著作の多い春陽堂と、発行・売捌の一切を引請けてくれた博文館とへの深謝を述べる一方で、「啻に複製を承諾せぬ而已ならず、不当の代価を以て譲渡を申込んで来た」書肆のあるため、収録を見送らざるを得なかった作のある憾みを記している。

序文に続く「紅葉山人著作年表」を見れば、むしろ収録されなかった作品の多きに及ぶ全集であることが瞭然とする結果（創作八十余篇のうち、収

録は四十五篇）となったのである。

あたかも春陽堂はこの全集刊行に先立ち、「新小説」一月号（九年一巻、明治三十七年一月一日）の巻末に、次のような広告を掲げていた。

秋風蕭殺として将星殞ち、我紅葉山人は空しく幽冥途を異にするの人となれり、天下知ると知らざるを論せず、其死を傷まざるなきと共に、俄かに氏の著述に接せん事を欲する者多きを以て、弊堂は茲に氏の著述目録を掲げて一覧の便に供せんとす。抑も氏と弊堂とは曩に堅く相約する処あり、其著は盡く弊堂に於て出版し、其書冊の意匠と、製本の監督とは、皆厳密なる氏の撿閲を経、始めて発售する者なれば、絵画印刷彫刻等に至る迄、盡く異彩を放たざるはなし。且つ尨然たる大冊と異なり、個個巻を別になす者なれば、机上の披読に甚だ便なり。

東京日本橋通四丁目　春陽堂　敬白

これはたしかに広告ではあるが、決して誇大ではない。紅葉生前の著書のうち、『金色夜叉』全五冊はもとより、「新作十二番」の『此ぬし』以来、実に二十九冊が春陽堂の刊本であって、これに次ぐ吉岡書籍店の四冊をはるかに凌いで、紅葉の著作を独占的に刊行してきたのだったからである。対して博文館は『二人むく助』『鬼桃太郎』『俠黒児』の三冊のみ、いずれも幼少年ものに限られており、全集を出すとすれば、その書肆は春陽堂であって博文館でないことは誰の目にも明らかだった。

広告文中に「尨然たる大冊と異なり、個個巻を別になす者」云々とは、明確に「大冊」の全集と対抗し、意匠を凝らした美麗な造本によって、ひとり紅葉のみならず、諸家の文名を揚げてきた文芸専門書肆としての春陽堂の自負を語るものだ。

なればこそ小波思案が第一巻の序文で春陽堂の厚意を特筆したのだし、在籍する二人の縁から晩年の『換菓篇』と『紅葉全集』を刊行することになった博文館が、営業部副支配人で生え抜きの内山正如を担任としたのは、春陽堂はじめ版権を持っていた各書肆との関係を遺漏無からしむるためであった。

同じ三十七年一月に出た『紅葉全集』の序文と春陽堂の広告文とは、紅葉をめぐる両出版社の関係を端的に示す徴標であるといってはばからない。

さて、先の「予約方法」によって発梓された『紅葉全集』に対し、どれほどの申込みがあったのか、資料を欠いていて判らないが、当時の「読売新聞」の購読者による「紹介」欄が一つの手がかりになる。

第一巻の刊行から半年後には、

紅葉全集予約権利譲り渡たさる御方ハ下名へ御一報を願ひます（豊多摩郡落合村三冬館永島宗太）（明治三十七年六月一日付・六面）

とあるのに対し、その月のうちには、

紅葉全集予約権譲渡したし御望の方ハ大至急下名迄申込ありたし（本郷区湯島切通坂町五一酒井）（同六月二十九日付・六面）

との告知が出ている。さらにこうした「予約権」の譲渡とは別に、

紅葉直筆の苦心惨憺たる義血俠血不言不語の原稿あり小説其他と交換したし（愛宕町二百華書院）（同十月二十四日付・四面）

と出た翌々日には、

紅葉原稿交換の儀第一申込者に対し紅葉全集全部と交換を了せり此段報告旁回答代ふ（百華書院）　（同十月二十六日付・六面）

とあって、早くも交換が成立している。「義血俠血」「不言不語」の二作が完全原稿であったのか判らないが、現在の常識では自筆原稿二種と紅葉全集全部とが等価であると考えるのは難しい。しかし、この時の『紅葉全集』はそれほど重んじられていたのである（なお、先述「紅葉山人二十七年忌記念展覧会」〈硯友社同人主催、於東京三越ギャラリー、昭和四年十一月三十日―十二月六日〉の出品目録中に船尾桂一所蔵の「不言不語」の原稿二巻が記されている）。

全集の編輯過程で版権問題に苦しんだこともあり、『紅葉全集』は当然ながら印税法であったが、巌谷小波は後年の座談会（「明治大正昭和文芸座談会」「文芸春秋」十一巻五号、昭和八年五月一日）で、第一巻が出た時に全冊分の印税として博文館から「四千五百円」が尾崎家遺族に支払われた、と述べている。かりに印税を定価の一〇パーセントで単純に計算すると、定価は一円八十銭であるから、印税「四千五百円」は、二五、〇〇〇冊分に相当する。当事者であった小波の言によもや誤りはなかろうが、なにぶん歿後三十年の時点の回想で、真偽を見極めがたい。より近くの報道では、歿後八年目の明治四十四年「読売新聞」紙上に文士遺族の現況を伝える記事中、紅葉遺族も取り上げられているのが参考になる。横寺町を引払い、「里方なる」樺島家の「芝区新堀町二五番地の居宅」に住む喜久未亡人はじめ四人の子供で営む暮しむきを、

尾崎家の経済は硯友社員の盡力によって発刊された紅葉全集の印税を以て充てられて居るが家賃だけは無論只で、暮しは紅葉在世の時よりも寧ろ有福だと云ふ噂である、

（「文士遺族の消息（中）」「読売新聞」明治四十四年六月九日付・三面）

としている。他に取り上げられた国木田独歩、川上眉山、二葉亭四迷、山田美妙の各遺族の状況に比しては恵まれている方だが、しかし、記事の伝える「有福」な状態が、その後も恒常的に続いていたわけではなかったことを証す徳田秋聲の言葉がある。

平生ちよつと感情の行違つてゐた大橋新太郎氏が、病気ときいて見舞に来てくれて、それから間もなく全集の出版を引受けてくれ、それで遺族は先づ救はれた訳だが、それは確か死後のことであらう。その印税にしても、一時入つたゞけで、全集は再版くらゐはしたかも知れないが、版権を持つてゐる春陽堂が、別に袖珍本の全集四巻を出したので、読者はこの方へ走る一方で、最近没後三十年を経過して、版権が消滅するまでは、年々歳々盛んに売れたくらゐだから、版権を借りて発行した博文館の全集の売れる筈がない。従つて印税もその時きりで、多年春陽堂の米櫃であつても、先生の遺族達は一文も貰つてはゐない。先生の死が今少し遅かつたら、先生のものも印税制に訂正され、従つて遺族も助かつたであらうと思ふが、先生の死はその意味でも、余りに早過ぎたのである。

（「代作」『思ひ出るまゝ』文学界社、昭和十一年四月二十日）

『紅葉全集』は第一巻に限っても大正十三年十一月の時点で十九版を重ねているから、「再版くらゐはしたかも知れないが」云々には誇張が含まれているけれども、全集が遺族にとってどのようなものであったかについ

て秋聲ならではの観察が利いた文章であり、長らく博文館に在籍し、かつ「楽天居」の別号をもつ畏友小波の回想には絶えて見えぬ内容であるといってよい。

文中、春陽堂の「袖珍本の全集」すなわち『紅葉集』（全四巻）は、博文館版発兌から五年後の明治四十二年八月より四十三年四月にかけて刊行され、各巻には斎藤松洲の木版色刷口絵が一葉ずつ付いている。春陽堂が版権を持つ作品を収めているので、「二人比丘尼色懺悔」はじめ初期作品は収められていないものの、文名が上って以後の主要作が網羅されており、第四巻は「金色夜叉」が廉価（博文館版の一円八十銭に対し一円四十銭）で手軽な一冊で読めるとあって、売行きは好調だったという。

なお、紅葉以後、鏡花、美妙、露伴、風葉、桜痴、渋柿、と続く袖珍本の全集が、博文館からの菊判大冊「名家小説文庫」全十二編への対抗であった点について、別稿（「泉鏡花「年譜」補訂㈨」「学苑」八五五号、平成二十四年一月一日）に述べたことがあるが、歿後に刊行された全集にもまた、両書肆の角逐をめぐるさまざまな経緯が纏綿しているのである。

先引、六月十日付の和達瑾宛書簡に紅葉が報じた近刊、発表予定のものは、「病骨録」「肖像入絵はがき」「換菓篇」「草もみぢ」「句集」「全集」「硯友社のデヂケエション」の七種であったが、すでに見てきた通り、生前に刊行の成ったのは『換菓篇』（十月二十四日刊）のみ、残りのうち『草紅葉』は冨山房から（十一月十五日刊）、『紅葉全集』は博文館から（三十七年一月十八日刊）、それぞれ刊行をみた。

これ以外のものはどのようになったのか。以下にまとめておく。

「病骨録」は、前節（「三大学病院入院」）にも記したように、「二六新報」三月三十一日付（一面）に予告が出たものの、掲載は実現しなかった。喜久夫人に「何か入院中の事を書き一冊にまとめて小さき本を出したしと考へ居いろ〳〵工夫いたし居候」（三月十日付）と書き送って、その心づもりも十分にあったのだが、生前の公表には至らず、歿後、文祿堂の『病骨録』（明治三十七年三月一日）として、「生死論」「観月」とともに収められた。袋と表紙に「尾崎紅葉先生遺稿」と印された文祿堂らしい凝った造本で、冒頭から三頁まで紅葉の自筆原稿を石版印刷し、途中の「門生筆記」の書出し部分にも紅葉の朱筆入の原稿を同じく石版印刷で挟み込み、本文は四号活字でゆったりと組んである。

「肖像入絵はがき」は、その発行が確認できていない。三十六年四月十六日付、大阪在の斎藤松洲宛書簡に「病中紀念の絵はがき又は病気見舞の返事用の書箋などに名趣向あれどもこしらへ候が例の慵く候唯々腹案のみに有之候」とあるので、腹案はこのころからあったことが窺える。前述、山里水葉筆記「十千万堂日誌」の九月十二日、二十三日に「換菓篇」の「写真」に関する記事が見られるが、あるいはこの『換菓篇』の口絵写真へ廻された可能性も考えられる。なお、後述「紅葉祭」の折には、肖像写真や各種雅印をあしらった「紀念絵はがき」が会場で頒布販売され、購入者はその余白に当日の他の参会者各位の揮毫を請うて記念としていたごとくであるが、現在までのところ、生前の「肖像入絵はがき」の所在はたしかめられないのである。

「句集」については、歿後の巌谷小波の言葉に、

尾崎君の生前にも、今度十千万堂百句を出すに付て、「それを書かう」、「是非書いて呉れ給へ」、「宜しい」と約束がしてあった、（「紅葉山人追憶録 第一」）

とあり、その書名が「十千万堂百句」となっていたことが知られるが、博文館版『紅葉全集』第一巻の「紅葉山人著作年表」の最末尾に、未刊の早稲田大学出版部の『鐘楼守』とともに、冨山房の『十千万堂百句』が記載されており、『草紅葉』の奥附あとの広告には、

故十千萬堂紅葉先生選
俳諧新潮　全一冊　郵定價金廿八錢　郵税金四錢
十千萬堂百句　全一冊　近刊　齋藤松洲子新意匠俳畫百面挿入俳席に於ける紅葉山人小波同挿繪　桂舟
袖珍名著文庫第四編
紅葉先生曲山校訂人　娘節用　全一冊　並製金廿錢　上製金廿八錢
袖珍名著文庫第十五編
全　世間娘氣質　全一冊　全郵税金四錢　上

とあって、より具体的な内容が判る。前述『換菓篇』『草紅葉』の装丁者であり、この『十千万堂百句』の「俳画」をものした斎藤松洲については次節（「見舞人のかずかず」）に詳しく述べる予定だが、その一部が紹介された松洲の「日記」（斎賀逸郎氏「斎藤松洲について」『目食帖』学生社、平成二年七月一日）の明治三十六年九月四日の条に「紅葉氏を訪ひ百句集挿画の相談を致す風葉、秋聲二氏に会す（…）草紅集の図案定める」、十日の条に「紅葉氏を訪ひ百句集の挿画二十図定める」とあるから、逝去の前月九月上旬の時点で冨山房版『十千万堂百句』の編輯は相当に進んでいたことになる。にもかかわらず未刊に終った理由は不明である。

かくして「句集」は冨山房版が松洲の俳画、小波の文、桂舟の挿絵まで決定しながら、刊行に至らず、おって三十七年以降に、三種の紅葉の句集（『紅葉山人俳句集』『紅葉句帳』『紅葉句集』）が出版されたが、これらについては、後節「歿後の出版物」の項で改めて述べることにしたい。

［付記］

前稿にもまして繁簡のよろしきを得ず、第六節のみで紙幅を越えてしまい、「臨終」「逝去」にたどりつくことができなかった。改めて続稿を期し、時間を要することの御寛恕を願いたい。

なお、引用文の仮名づかいは原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文字に改め、読解に必要なルビを残した。

本文中にお名前を記した方々のご教示のほか、資料の調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、国文学研究資料館、青山学院大学図書館、本学図書館近代文庫のお世話になった。併せて深謝申し上げる。

［前稿「尾崎紅葉の死―その前後（一）―」の訂正］

●78頁下段1行目　当然ながら → 削除
●80頁上段8行目　本名泰助、→ 削除
●83頁上段6行目　文久三年生れトモ → 削除
●86頁下段19行目　十三日 → 十三日（ママ）

（よしだ　まさし　日本語日本文学科）